

## 62. 「丙午」の年、再起の刻<sup>とき</sup>

# 医事万華鏡

かつて世界を席

巻した日本発の科学研究

は、いま静かな岐路に立っている

ます。半導体やAI、バイオ、エ

ネルギーといった最先端分野におい

て、日本は国際競争力に遅れをとっている

と語られることが増えました。研究や技術の種は確かに存在するにもかかわらず、それがイノベーションとして

結実し、社会や産業を動かす力へと転化しきれていないのが現状です。この停滞の正体こそが、私たちが真正面から

向き合い、打開すべき課題と言えるでしょう。

しかし、日本における科学の在り方全てが問題と断じる

のは早計です。長い時間軸の中で基礎を積み重ね、ノーベル生理学・医学賞（2025年）という世界的評価に至った坂口志文氏の歩みは、そのことを証明しています。派手

な成果を急がず、流行に迎合せず、それでも探究をやめな

かった姿勢は、日本人の研究文化が本来持つ粘り強さと誠

実さを象徴しています。ただ同時に、そのような成功が「希

少な例」として語られるようになった現実、次世代の芽

が育ちにくい土壌を示唆してもいます。

この状況は、しばしば「丙午」の時代になぞ

らえられます。迷信という目に見えない力に

よって出生が控えられ、可能性そのものが語ら

れぬまま時を過ごした年。しかし丙午は、単な

る忌避の象徴ではありません。そこには、ポジティブな動機

はポジティブな結果を導く、というジンクスが重ね合わされ

てきました。困難な運命を承知の上で選び取られた意志は、

むしろ強靱さと独自性を備え、後の時代に新たな価値をもた

らす——そんな逆説的な希望が、丙午には宿っているのです。

日本の科学技術も、いままさにその地点にあります。失敗

を恐れ、前例に縛られ、挑戦を先送りしてきた時間は確かに

長かったかもしれませんが。しかしだからこそ、これからの一

歩は「選び取られた挑戦」となり得るのです。研究者に自由

な時間と裁量を与え、若い才能に長期的視野で投資し、失敗

を次の「知」へと変換できる制度を整えること。そのすべて

は、未来を信じるというポジティブな動機に根ざしています。

科学技術立国・日本の地位を取り戻すということは、過去の

の栄光をなぞることではありません。不確実性を引き受け、

意志をもって未来を選び取ることです。丙午の年に生まれた

命がやがて社会を支える力となったように、いま時かれる挑

戦の種は、必ず次の時代の実りとなります。

静かな覚悟と確かな希望を胸に、日本発の科学技術は再び

世界へと歩み出します。その始まりは、既に私たちの手の中

にあるのです。

（JMS主幹・野村元久）

